

【 7 】

氏 名	小 嶋 秀 夫 こ じ ま ひ で お
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	教 博 第 4 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	教育学研究科教育方法学専攻
学位論文題目	親子関係把握の方法論的研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 倉 石 精 一	教 授 佐 藤 幸 治	教 授 芋 阪 良 二
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、親子関係の心理学的研究に対して、方法論的提案を行ない、研究の進展に寄与することを目的としている。第一部では、親子関係把握の方法について理論的考察を行ない、第2部では、第1部で提案された方法による10個の実証的研究の結果を報告し、方法論的提案の意義を確かめている。

親子関係に関する従来の研究の大部分は、先行変数（育児法、子に対する態度等）の測定を、親、子どもまたは観察者のうちのただひとつの源泉によっている。かりに親子関係に関する情報を、子どもから得たとすれば、その測定は、後続変数である子どもの人格や行動の影響をさげ得ないから、両変数間の真の関係を決定することはできない。また親や観察者の記述によって、先行変数を決定したとすると、それと親の実際の行動とが一致している保証もなく、さらに親の実際の行動とそれに対する子どもの認知が一致するという保証もないので、先行変数と後続変数との間に、2ステップのギャップが生じる。したがって親子関係の情報を、ひとつの源泉からうるのは不十分であり、多面的の把握が必要になる。

この多面的な情報を統合するには、親と子どもの記述の対応関係を調べ、またそれぞれの記述の枠組の類似性の有無を吟味しなければならぬ。親や子どもの親子関係の認知の一致、不一致は、親子関係のダイナミックスの指標として重要であるが、これを上述の吟味を経ずに論ずるのは妥当でない。

この問題を解決するために、まず親と子どもあるいは観察者が認知している主観的な関係を調べること（第1段階）、その関係相互間の関連を理解すること（第2段階）、それをさらにより広い客観的な文脈の中に位置付ける（第3段階）研究方法を提案する。

第1段階の実証的研究は、（研究Ⅰ）2名の幼児についての1週間にわたる母—子接触の記録分析、（研究Ⅱ）子どもに対する親の態度行動についての、6才児から14才児までの認知の発達をCCP（子の親認知テスト）で測定、（研究Ⅲ）児童が親を記述するとき使用する次元の発達の变化に関する質問紙調査等である。これらの研究によって、各年齢の子どもにとってそれぞれ重要と思われる親子接触の局面が明らかにされた。すなわち、愛情—敵意、受容—拒否の次元に対する子どもの強調は、幼児から中学生まで

一貫しているが、年少児は情緒面を強調、年長児では理解尊重の面を強調する傾向がある。また統制—自律、支配—服従の次元に関しては、年少児は親による援助の面を重視し、年長児は親からの独立、自立の面を強調する傾向がみられる。

第2段階の研究は、(研究Ⅳ) 子に対する親の態度行動が、親と子の双方に対してもつ意味の情緒的側面をSD法(意味微分法)によって調べる。(研究Ⅴ) その認知的側面を質問紙を用いて調べる。(研究Ⅵ) 以上のふたつの資料の関係を因子分析法により明らかにする。(研究Ⅶ) 子に対する母親の態度行動についての幼稚園教師の記述と、幼児の認知との比較考察等であった。

因子分析の結果から、中学生の年令では親と子の使用する記述の枠組間に高い共通性が認められ、また親の記述との類似性は、男子よりも女子に高く、同性の親子間の方が、異性の親子間よりも高い傾向が認められた。幼児と教師の記述の比較において統制の次元では類似性があるが、愛情または受容の次元では喰いちがいが生じやすい。

第3段階の研究は、(研究Ⅷ) 子どもの人格的要因(YGテストによる)と親の態度行動との関連の調査、(研究Ⅸ) P-F Studyの結果と、親についての認知(CCP)との関連の因子分析的研究、(研究Ⅹ) 幼児の対人認知様式の性差や人格要因の影響に関する検討等であるが、これらの研究によって人格の諸側面のうち、情緒安定性の欠如や不満性、外罰・無罰傾向の程度等が重要な変数であることが確かめられた。

以上の10個の実証的研究は、それぞれの段階の問題のすべてを明らかにしたものではないが、親子関係の研究分野に対して行なった方法論的提案の意義を裏付けたものである。

論文審査の結果の要旨

心理学における親子関係の研究は、その歴史も古く、数も多いが、資料を処理する際の位置づけ、方向づけの枠組に関する吟味が不足し、とかく結論が安易に流れ、正確さを欠くきらいがあった。本論文は、これに対しこの領域の研究を方法論的に検討し、より確実な資料の処理法を提案し、これを10個の実証的研究によって確かめている。

まず、親子関係に関する資料の情報を、ひとつの源泉にしばった場合、例えば親の子に対する態度行動が、子の人格形成に律響を及ぼす事象の説明に、いくつかの難点の存在することを論証しているが、この理論的考察は明快であり、まさしく重点を指摘しているものである。

ここで親子関係の多面的把握が必要とされるが、多面的情報を整理し、これを有用のものとする手続の提案は、秩序だった緻密な計画によるものであり、みずから行なった実証的研究により、その可能性を立証している。

従来の親子関係研究において、比較的多く使用された記述の次元は、愛情—敵意(受容—拒否)と統制—自律(支配—服従)の2次元であったが、これらは相互に独立しているが、同じ水準にある次元と考えられてきた。これに対し本論文は、この2次元について、前者は現実の親—子接触の様式と直接対応する次元であるに対し、後者は解決・意味付けの過程が介在することにより測定値が変動しやすい次元であることを指摘している。これはなお論議の余地があるが、今後の研究に有力な示唆をあたえるものと思われる。

る。

において、多面的な親子関係把握について、異なる記述の対応関係を調べ、この間の一致・不一致を論ずることを可能にするために本論文においてとられた手続は、創意的であり、科学的に洗練された作業によって行われている。以上は単に研究方法の開陳であるに止まらず、その研究過程においてえられたいくつかの新知見は、教育心理学に寄与するものである。

よって本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認められる。